奈文研ニュース

No.42 Sep.2011

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人　国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.mabunken.go.jp/

東日本大震災と文化財レスキュー

３月 11 日に生じた東日本大震災では、津波の直撃により三陸地方から北関東にかけての沿岸部で多数の犠牲者を出しました。更に、福島第一原発で深刻な放射能事故が生じ、現在も未だ収束の目処がついていません。私たちは震災の直後から、深刻な津波被害や、原発事故の推移をニュースで見守るしかなく、文化財の被害については、ほとんど情報が無いままでした。震災からほぼ１ケ月が経過した４月 15 日、文化庁の要請によって全国の文化財関係等、18 機関の代表が東京文化財研究所に集まり、文化財レスキュー（救援）の実施が決定されました。

具体的な活動は、宮城県からの要請によって、4 月 19 日に仙台市博物館に現地本部を設置し、翌日から石巻文化センターを手始めに、県内の文化財関係機関とともに文化庁、東京文化財研究所、奈良文化財研究所が主体となって始まりました。私の最初の仙台行きは、ＪＲ線は不通、飛行機は満席で、ホテルも無く、やむなく寝袋を携えて大阪から仙台行きの夜行バスに乗り込むことになりました。

石巻文化センターは石巻湾に面して作られた大規模な複合文化施設で、縄文時代の沼津貝塚出土品を含む「毛利コレクション」が収蔵されていることで有名でした。私たちがセンターの建物に立ち入ってみると１階の天井まで津波の跡があり、館内の至る所に、付近の製紙工場から流入した紙の原料や、ガラス扉を突き破って流されてきた乗用車、館内の大きなパネル類、スチール棚、展示されていた大きな民具等が積み重なり、歩くこともできない状態でした。レスキューの第一歩は、それらの流入物を人力で撤去することでした。幸いなことに頑丈なカギがかかった貴重品庫は、浸水もわずかで毛利コレクションも軽微な被害ですみました。前後して、美術品や、考古・民俗資料等の収蔵庫のレスキューも、5 月中にほぼ終えることができました。その間、他の国立文化財機構や民族博物館、その他の組織の職員も続々と参加し、レスキュー活動は順調に進みました。奈文研では現地での公用車の不足に対して、奈良から仙台まで職員がハンドルを握って８人乗りのワンボックス車を移送し、また、5 月後半から 7 月末まで、毎週月曜日から金曜日まで、交代で常時、3、4 人の職員を派遣して大きな戦力となりました。石巻文化センターと併行して、宮城県内各地の文化財収蔵施設、津波に遭った神社の神像や懸仏のレスキューも進めました。特に古文書類のレスキューは、民間の冷蔵会社の協力をいただき、カビや劣化の進行を防ぐためこれらを凍結させ、奈文研が中心となって、順次、真空凍結乾燥機で水分を除去する等応急処理にあたっています。

（埋蔵文化財センター　松井 章）

石巻文化センター

石巻文化センター内部

発掘調査の概要

キトラ古墳石室内の調査（飛鳥藤原170次）

キトラ古墳壁画の取り外しが、2010年秋に無事終了しました。奈良文化財研究所都城発掘調査部では文化庁の委託を受け、壁画の取り外された石室内の考古学的調査をおこないました。調査の主な目的は、床面に残る漆喰の状況および壁画や漆喰取り外し後の石材表面の精査と、石室構造についての検討です。調査は奈文研、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の３機関による合同調査で、調査期間は2011年６月13日～24日の２週間でした。

調査の結果、床面の漆喰上に棺台とみられる痕跡を確認しました。床面には、東西両端に幅約18㎝、北端に幅約20㎝の漆喰が良好な状態で残存する部分があり、その表面は後世の土砂の流入により、茶色く汚れていました。そして、その内側には他よりも白色を呈する漆喰が幅約３㎝の帯状にのびる状況が認められました。このような床面の状況から、内側の帯状にのびるきれいな漆喰上に棺台が置かれていたと考えられ、ある程度の期間、床面漆喰上に棺台が載っていたため、土砂による土汚れを免れたと想定できます。棺台の痕跡が確認できたのは北辺、東辺、西辺の３辺であり、南辺については漆喰の残存状況が悪く、残念ながら確実な位置を特定できませんでした。

棺台痕跡の東西幅は68㎝、南北長は西辺で137.5㎝が残っていました。棺台が石室のほぼ中央におかれていたと想定すると、棺台の長さは約２ｍに復元できます。棺台の痕跡は高松塚古墳でも見つかっており、大きさは幅66㎝、長さ217㎝と想定されています。高松塚古墳では棺自体の大きさが幅58㎝、長さ199.5㎝であることが判明しており、床面漆喰上で検出された痕跡が棺の大きさを上回ることから棺台の痕跡と特定されました。キトラ古墳の場合、棺の大きさは不明ですが、床面漆喰上の痕跡の幅は高松塚古墳の棺台痕跡の数値と近似しています。

キトラ古墳における棺台の痕跡は、2004年に撮影したフォトマップを通してその存在を推測してきましたが、今回の精査で、それとほぼ同様の位置で痕跡が明瞭に残存する状況があきらかとなりました。

また、石材表面の精査をおこなったところ、赤色の顔料で引かれた線の一部を約70ヶ所で確認しました。途切れている部分を補って復元すると、朱線は計20本になります。これまで判明していたものは床面１本、天井５本の計６本でしたが、漆喰を取り外したことで朱線が明瞭に観察できるようになり、今回の調査で新たに14本が確認されました。これらの朱線は石材の外周縁にみられるものが多く、主に石材を加工する際の基準線として利用されたものと考えられます。

更に、壁石を精査した結果、石室の入口部を閉塞する南壁石の高さが、他の壁石よりも２㎝ほど低く加工されていることが判明しました。これは石室の開閉を容易にするための意図的な工夫と考えられますが、その結果、南端の天井石が南に向かって傾き、その北側の天井石との間で、天井面に1㎝ほどの段差が生じている状況があきらかになりました。

今回の調査では、これまで実施できなかった床面上の精査により、棺台の痕跡が良好に残存していることが確かめられました。また、朱線や石材の加工状況等、石室の構築方法についての重要な知見が得られました。今後、これらの調査成果を、キトラ古墳の構築過程の復元や保存・活用に役立てていきたいと考えています。

（都城発掘調査部　若杉 智宏）

床面の棺台痕跡（南から）

天井石の朱線（左が東、下から見上げる）

平城宮跡東院地区の調査（平城第481次）

平城宮の東院は、皇太子や天皇の宮殿がおかれ、華やかな儀式や宴会がおこなわれたことが知られています。2006年度から断続的な調査を進めており、今年度は昨年度の第469次調査区の西隣において発掘調査をおこないました。東院地区の北西部にあたり、調査面積は816㎡、2011年４月４日より調査を開始し、６月24日に終了しました。６月23日には現地説明会を開催し、天候不良の中、650名もの方々に脚をお運びいただきました。

検出した遺構は、建物13棟、塀７条、柱穴列１条（以上はいずれも掘立柱）、溝３条、土坑１基等です。周辺の調査成果を含め検討した結果、これらは６時期以上に区分することができ、東院地区西部のこれまでの調査と同様に、建物群の頻繁な建て替えがあったことがあきらかになりました。

区画施設に着目すると、大きな改変であったことが明確になります。１期から２期には東西溝、東西塀により、南北に区画していたのが、３期には一転して、南北塀により東西に区画されます。４期にはこの塀も廃され、前後の時期と異なる土地利用がなされましたが、５期には再び３期に似た建物配置がなされます。そして６期になって、南北80尺におよぶ空間が南北に２つ並ぶようになりました。建物や堀の配置の変更が繰り返されながら、奈良時代の末期には極めて整然とした区画が設けられたことがあきらかになったのです。

これらの変化は、東西溝の付け替え等排水計画の変更もともなうものでした。昨年度の調査で、石組溝の存在があきらかになっていましたが、今回の調査ではその全容があきらかになりました。詳しくみると、この石組溝は、安山岩、花崗岩（かこうがん）、凝灰岩（ぎょうかいがん）といったさまざまな石を寄せ集めて、構築されていました。周辺の排水を集めていたものと考えられ、東から西へと強い傾斜をもっています。当初は、東西にまっすぐ通されていましたが、ある段階で右下の写真のように下流部分を北へとクランクさせています。傾斜地を利用しているこの周辺は入念な排水計画が必要とされていたことを物語っています。

建物に着目すると、東院地区西部でこれまで検出されていた大規模な総柱建物は調査区南辺にのみみられ、他は比較的規模の小さなものでした。また、出土遺物をみると、北部を中心に大型の甕（かめ）類等、土器の出土量が多く、この周辺に東院地区の中枢を支える裏方ともいうべき、厨（くりや）や貯蔵施設等が展開していたことが想定されます。

こうみると、裏方的な性格をもつ今回の調査区ですが、その一方で須恵器や銅で造られた火舎の獣脚が出土しています。相当な地位にある人物が使用した貴重なものと考えられます。東院地区中枢部へと迫る今後の調査への期待がますます高まってきました。　（都城発掘調査部　鈴木 智大）

第 481 次調査区と宇奈多理神社の森（北西から）

急な傾斜をもつ石組溝（西から）

奈文研ギャラリー（34）法隆寺献納宝物「四十八体仏」

重要文化財：法隆寺献納宝物四十八体仏

今年の飛鳥資料館秋期特別展では、各地から飛鳥に帰る至宝をご覧にいれます。その中の名品をご紹介しましょう。

法隆寺献納宝物四十八体仏。これは、明治11年（1878）に法隆寺から皇室へ献納された宝物で、この中には飛鳥の橘寺から法隆寺へと渡っているものが含まれています。しかし、どの仏像が橘寺から移されたかは定かではありません。

今回展示する２軀は飛鳥と関連が考えられ、橘寺由来のものであれば、約930年ぶりに飛鳥へ帰ることになります。

（飛鳥資料館　成田 聖）

阿弥陀如来および両脇侍像

光背は失われるものの、三尊は完存しています。中尊は白鳳仏と考えられ、阿弥陀仏であることがわかっています。明確に判明する事例としては、わが国最古の阿弥陀仏像とされています。台座背面には、「山田殿像」の銘文が刻まれており、山田寺との関連を説く考えが出されています。中尊高さ 30.7 ㎝

如来立像

面長の顔立ち、厚手で長い袖のついた通肩の法衣、胸にみられる斜めの下着の縁、平行の線を繰り返して表現する衣文線などの特徴から、止利（とり）様式のものとされています。同様式でも年代的に新しいものという評価もされています。

蓮花座蓮弁には火炎紋がみられ、同様の火炎紋が渡来系の東漢（やまとのあやうじ）氏の氏寺でもある檜隈（ひのくまでら）寺の軒丸瓦にもみられ、両者の関連も説かれています。高さ 34.1 ㎝。

平城宮跡資料館 新規常設展示「考古科学コーナー」の開設

平城宮跡資料館に、新しく「考古科学コーナー」がオープンしました。このコーナーでは、奈良文化財研究所埋蔵文化財センターでおこなっている文化財の科学的な研究、最新の技術について紹介しています。会場は、「保存科学」「環境考古学」「年輪年代学」「測量と探査」の四つの分野に分かれており、今までの歴史展示とはひと味違う、科学的な内容になっています。

「理系の分野は何だか難しくて…」と思われるかもしれませんが、そこは大丈夫！楽しみながら理解していただけるよう、さまざまな体験コーナーを設けました。「保存科学」では、保存処理前と処理後の木材をさわって比べたり、実際の調査に使用していた赤外線サーモグラフを使ってモノの中身を推測できます。「環境考古学」のコーナーでは、フルイをふるったり、顕微鏡をのぞいて、出てきたモノが何であるのか調べることができます。「年輪年代学」では年輪のでこぼこをさわって木の構造を理解し、「測量と探査」では、土器の３Ｄ画像をくるくるまわして観察できます。

７月30日からオープンし、８月の間は夏休みの家族連れなど、沢山の方々にお越しいただきました。アンケートを拝見しますと、体験コーナーをはじめ皆様に楽しんでいただいているようです。まだご覧になられていない方は、是非資料館に足をお運びください。　（企画調整部　渡邉 淳子）

展示室のようす

「奈良応援せんと委員会」を設立

今年の３月11日に発生した東日本大震災により、被災地においては、地域の人々の誇りであり、アイデンティティーの基盤でもあり、また、国民共有の貴重な財産でもある文化財の多くが被害を受けました。このため、現在、奈良文化財研究所も参加している被災文化財等救援委員会等が中心となり、官民あげての文化財レスキュー事業（被災文化財の保全、救出、応急措置等をおこなうもの）がおこなわれています。

しかしながら、文化財を守るための活動には多大な経費が必要となるため、４月には、文化庁長官により、これらの事業に対する募金等の支援・協力が呼びかけられました。

このような状況の中、文化財の宝庫であり、文化財の保護に理解と関心の深い「奈良」だからこそ何かできることはないだろうか、また、昨年の平城遷都1300年祭をはじめとして、これまでに被災地域の皆様にはもちろんのこと、全国の文化財や歴史を愛する皆様からいただいた「奈良」へのご支援やご厚情に対して恩返しできることはないだろうかと考え、奈良県内の文化財、教育等の関係機関・団体、企業等が連携し「奈良応援せんと委員会」を設立しました。

委員会では、各所での募金活動をはじめ、チャリティーコンサートの開催等、それぞれが有する力を「奈良の力」として結集することで、文化財レスキュー事業等への支援をおこなうこととしています。

８月31日現在、約1,000万円の支援金が集まっており、今後、このような活動が全国に展開されるためのさきがけとなることを期待しています。

（研究支援推進部　田中 康成）

チャリティコンサート「音燈華」での募金活動のようす

文化財担当者専門研修「建造物保存活用基礎課程」について

文化遺産部建造物研究室では、行政に所属する文化財担当者が歴史的建造物（文化財建造物）の保存・活用にかかわる基礎知識を修得することを目的として、本年度新たに標記研修事業を企画し、実施しました。

今回、6月20日から24日の5日間、北は北海道から南は鹿児島まで、20名の県や市町村に所属する研修生が奈良文化財研究所に集いました。日本建築史や調査、制度、修理、管理活用等の研修棟での座学のほか、矢田の大和民俗公園で民家、法隆寺で社寺の調査概論、奈良県文化財保存事務所が実施している當麻奥院方丈（たいまおくのいんほうじょう）と當麻寺仁王門の修理工事現場で保存修理についての臨地講義をおこないました。行政の文化財担当者でも実際の建造物修理現場を見学することは稀なので、特に當麻寺では修理にかかわる技術者や大工さんの話を皆さん大変興味を持って聞いていました。

建造物研究室にとって初めての主催研修であり、研修生が大勢であったこともあって、不慣れな点が多々あったのですが、研究支援推進部の援助を得てなんとか所期の目的を達成できたのではないかと思っています。

今回、現場が奈良県ということもあって、研修内容は近世以前の主として木造建築にかんすることが多かったのですが、研修生が実際に実務として携わるのは近代建築が多いので、次回以降は近代建築に焦点を当てた研修プログラムを工夫しようかと考えています。

（文化遺産部　林 良彦）

當麻奥院での研修風景（奈良県文化財保存事務所山下技師による奥院方丈の瓦の説明）

真空凍結乾燥機の現地公開を実施

被災文化財等救援委員会では、東日本大震災で被災した水損文書類の救援にも取り組んでいます。水損文書類は、カビが生えたり、場合によっては腐敗してしまうため、できる限り早急に回収し、乾燥させる必要があります。乾燥させるには、風乾や真空凍結乾燥機による処置がありますが、大量の水損文書類を処置するためには時間がかかってしまうため、救援委員会では、一時的な保管手段として、奈良市場冷蔵株式会社の協力を得て、回収された水損文書類を冷凍し、順次、乾燥をおこなっています。

そうしたなか、奈良文化財研究所では、文化財レスキュー事業の一環として、救援委員会の要請を受け、水損文書類を真空凍結乾燥機を使って、乾燥させる作業をおこなっています。

この文化財レスキュー事業に、より理解を深めていただくため、7月12日および26日に真空凍結乾燥機の現地公開をおこないました。事前に新聞やウェブサイト等で募集したところ、募集開始初日で予定を上回る申し込みがある等、文化財保護への関心の高さに驚かされました。

現地公開は、1回の参加者を20名とし、約30分間で実施しました。参加者は、高妻洋成保存修復科学研究室長から、水損文書類の早急な救出の必要性や真空凍結乾燥の仕組み等について詳しく説明を受け、その後、真空凍結乾燥機に設けられている監視用の窓から内部の様子を交代で見学するとともに、すでに凍結乾燥を終えている文書類を見学しました。参加者からは、乾燥後の修復作業方法や今後の文化財レスキュー事業について多くの質問等が寄せられました。

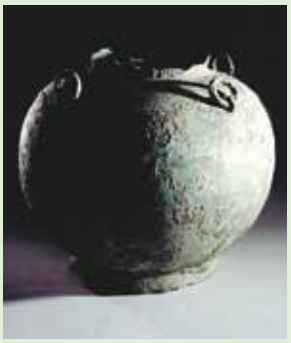
今後も、可能な範囲で現地公開等をおこなうことで、文化財保護の普及・啓発にも取り組んでいきたいと考えています。（研究支援推進部　田中 康成）

真空凍結乾燥の説明を受ける参加者

飛鳥資料館秋期特別展「飛鳥遺珍－のこされた至宝たち－」

約 1400 年前に都が置かれた飛鳥は、当時、我が国の政治、文化、経済の中心でした。そして、当時の様子を物語る遺物が眠る飛鳥。そんな飛鳥の地では、戦前から数多くの発掘がおこなわれてきました。当時の発掘によって明日香村から出土した遺物は、各地の博物館や大学で展示されていたり、大事に保管されているものがあります。また、様々な経緯により村を離れた文化財もあります。今年の飛鳥資料館の秋期特別展では、そんな明日香村の至宝達が、里帰りし一堂に会します。ひさしぶりに、飛鳥の地へもどる至宝をご覧になり、ぜひ 1400 年前の輝きを体感していただきたいと思います。

（飛鳥資料館　成田 聖）



「宮内庁三の丸尚蔵館所蔵：金銅製四環壺」

会期：2011 年 10 月 14 日㈮～ 11 月 27 日㈰
開館時間：9：00 ～ 16：30（入館は 16：00 まで）
お問合せ：☎ 0744-54-3561（飛鳥資料館）

平城宮跡資料館 秋期企画展「地下の正倉院展－コトバと木簡」

秋は正倉院展の季節です。奈良文化財研究所 平城宮跡資料館では、奈良国立博物館でおこなわれる正倉院展の時期にあわせて、『地下の正倉院展』を開催しています。同じ奈良時代の品でも、こちらは奈良の都、平城宮の地下に眠っていた木簡の展示です。木簡は、光や乾燥に弱いので、まとまった実物資料を見ることができるのは１年のうち、この『地下の正倉院展』の時期のみ。５回目を迎える今年は、音声言語と書写された文字・「コトバと木簡」を中心に展示します。

（企画調整部　渡邉 淳子）

会期：2011年10月18日㈫～11月27日㈰　※会期中、展示替えを２度おこないます。
（Ⅰ期）10/18～30　（Ⅱ期）11/1～13　（Ⅲ期）11/15～27
ギャラリートーク：（Ⅰ期）10/23㈰　（Ⅱ期）11/6㈰　（Ⅲ期）11/20㈰　14:00～
会期中休館日：10/24、31、11/7、14、21 の月曜日
開館時間：9：00 ～ 16：30（入館は 16：00 まで）
お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

平城宮出土木簡：
木簡の文字「津玖余々美（つくよよみ）」は、一音に漢字一字をあてた万葉仮名で書かれている。

■　お知らせ

公開講演会（109 回）
2011 年 10 月 15 日㈯
於：平城宮跡資料館

特別公開講演会（東京会場）
2011 年 12 月 3 日㈯
於：学術総合センター　一橋記念講堂

飛鳥資料館　秋期特別展
2011 年 10 月 14 日㈮～ 11 月 27 日㈰
「飛鳥遺珍－のこされた至宝たち－」

平城宮跡資料館　秋期企画展
2011 年 10 月 18 日㈫～ 11 月 27 日㈰
「地下の正倉院展－コトバと木簡」

■　記　録

現地見学会
○平城第 483 次発掘調査（興福寺北円堂）
2011 年 9 月 17 日　800 名

埋蔵文化財担当者専門研修
○石器・石製品調査課程
2011 年 9 月 12 日～ 16 日　14 名
○自然科学的年代測定法課程
2011 年 9 月 26 日～ 30 日　3 名

飛鳥資料館　夏期特別展
2011 年 8 月 2 日～ 9 月 4 日
「鋳造技術の考古学－東アジアにひろがる鋳物師のわざ－」　3,047 名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
E メール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2011 年 9 月